
Magical Days

sachi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c a l D a y s

【Nコード】

N 4 6 5 9 T

【作者名】

s a c h i

【あらすじ】

※自サイトから転載

魔法研究家である我輩、ユークがうっかり召喚してしまった少女と繰り広げるドタバタした日常。
少女は無事帰れるのか？

いとはじまり

我輩は魔法研究家である。

魔族である吾輩の一族は皆そろって個人主義で、誰がどこで何をしているかは全くわからず、そして逆も然りである。

よって我輩はここ数十年は一人この屋敷に住み、趣味である魔法研究に日々を費やしていたのだ。

本日の研究は魔方阵による使い魔の召喚である。

魔族であればすでに使い魔くらいいいのかというご指摘をもらいそうだが、昨今の魔界では魔力の低下が著しく、もはや浮いたり飛んだり手からビーム等といった力は極一部にしか使えないということをご理解頂きたい。

特に我輩は凡人も凡人。僅かばかりの魔力しか持ち合わせていない。しかし、それらを補って余りある程の知識と頭脳で、我輩は日々研究を進めているのである！

…少々取り乱した、申し訳ない。

そう、そして本日はここ数年の研究の集大成である使い魔の召喚を行うのだ。

「ラカよ、そこにある聖水を取ってくれ」

ふむ、本日は天気も良く、実に召喚日和と言える。

我輩はカーテンの隙間から零れる日差しを感じながらも魔術書から目を離さずに片手で助手へ指示した。

「やだ。ユークの方が近いじゃんか」

「今日の君は我輩の助手ではないのかね…」

我輩は垂らせば肩につく程の赤髪を無造作に束ねた青年を横目で睨む。

彼は幼少の頃よりの友人で、時頼この屋敷へとやってきては研究の邪魔をし、かと思うとぐうたらと寝て過ごし、気がすめば帰ると言った気分屋だった。

そんな彼が昨晩いつものようにふらりとやってきて本日の実験の話を聞くと、俺も見たいと言いだしたのだ。

そして正直一人では少々不安を感じていた我輩は、助手としてならば、と、立ち会いを許可したのである。

「ねえ、まだなの？ 召喚」

「まだである。こういった術は繊細であり、慎重にことを進めねば」
「面倒だなあ」

助手であり友人であるラカは退屈そうに足を組み直し頬づえをついた。

そんな彼に呆れながらも、研究の成果を早く試してみたいのは我輩も同じである。

彼に頼んだはずの聖水を自身の手で取り、ゴホンと咳払いをしてから仰々しく言葉にする。

「と言ってもあとはその聖水を垂らし、使い魔の座標を合わせるだ

けなのだが…」

「咳とかいろいろワザとらしい。貸して、俺がやる」
「っ！？ラカ！何を…！」

説明をしている途中で痺れを切らしたラカが我輩の手から聖水を奪うと、そのまま我輩の止める声など聞かず、さっさと聖水を床に敷いた魔方陣にかけてしまう。

我輩は哑然とする。そうだ、この男は元々邪魔ばかりする男だったのだ！

「だってユーク、もったいぶるんだもん。座標指定くらい俺も出来るよ」

「そういう問題ではないのだ！我輩には指定するはずの対象が…！」

我輩の声など右から左のラカは右手を服のポケットに突っ込み、空いた手を魔方陣へとかざしている。なんて雑な！

更に恐ろしいことにその手をかざしたままに視線をこちらに向けて会話を続ける。

「とりあえず実験なんだし、いらなかったら返せばいいんじゃない？」

「そういうわけにはいかんのだ！」

「えー？」

こういった術は集中力や術軸が重要なのである。いかに魔力の高いラカであろうと、もはや本日の召喚は失敗である。

なんだよー等と言って面白くなさそうなラカを視界から外し、大きな溜め息を吐き出した。

失敗例などももちろん調査済みなのだ。研究に研究を重ねたのだ。こういった指定対象用の魔方陣で違う座標を示した力で行ったりすると、たいてい召喚されるのは石や木くずなどといった生命力のな

い固形物なのである。たとえば魔方陣が光ろうとも、我輩の輝かしい研究の日々は水の泡…？

「光って、いる？」

「なに？光っちゃまずいの？」

「召喚失敗の際は灰色の煙幕とともに石などの固形物が現れるはずなのである」

「てことは？」

「光は生命力の現れ…ラカ、何を指定したのだ？」
「うーん…」

ラカが先ほどの指定時の視界を思い出そうと首をひねる。確かに指定時の視界は一瞬なのだ。しかしその間にも光は尚も大きくなっている。

「元々の指定が魔方陣にあったから、ユークが欲しいもん付近が見えたんだよね。っても、ざっくりした色だけ。だからなるべくカラフルで、できるなら可愛い子がいいな…って」

「カラフルで、可愛い子…？」

「うん。お手伝いしてくれるなら可愛い子に越したことないでしょ」

可愛い子…それは女子を指すのか？そうなのかラカ！？しかも”いない”って何で雑で曖昧な指定！

しかも、研究一筋数十年、我輩にとって唯一未知の領域であるのが女子なのだ。

混乱する我輩に遠慮することなく大きく輝きを増す光に動揺を隠せず、我輩は何かが起きるのをひたすら脅え待ち、ラカは溢れる好奇心で楽しそうに光を見つめる。

その数秒後、一段と強い光が、我輩の研究部屋を支配した。

飼育委員あらわる

夜寝て起きたらファンタジー。穴に落ちたらブラックホール。

世の中にはいろんな異世界アドベンチャーストーリーが数多あれど、それらは全て小説やドラマの話であり、現実には起こりえない。そう、そのはずなのよ、本来。

でもこんなありきたりな否定の仕方に入るしかない今の私の状況は、まさにそんなワンダーランドにこんにちわ状態。

ねえ、これって、現実？

そう、確か私はなりたくもなかった飼育委員のせいで放課後を校庭で過ごしていたのよ。動物病院の娘さんだから飼育委員が良いと思います、なんて推薦されちゃって。みんな犬くらい飼ったことあるでしょ？私の知識なんてそんなもんなのに。

「しかもなんで、鳥係…」

鳥かごの中はフン臭いわ、羽根はつくわで最悪。我が校にはウサギが3匹とインコが2羽。委員全員でウサギ係と鳥係に分かれて週毎の当番制だ。

友人などはなんだかんだ放課後に世話をしている私を結局動物好きなのだと笑って片づけるが、私としては”仕事をほっぽり出して帰

れない優等生の性格ゆえ”とってもらいたい。

そんな委員会の仕事も手慣れたころ、それはいきなり起こったのだ。いつも通りセキセイインコ（青）の周りを片づけてエサをセットし、セキセイインコ（黄と緑）の世話にとりかかろうと指の上にインコを移したところで、急に暗転したのだ。

そう、暗転。家の中にいたら急に停電、みたいな感覚。人間驚くと何も出来ないものよね。驚いて固まってる、電気がついたみたいに明るくなって、見えた景色が白い部屋と男が二人自分を取り囲んでる様子でしたとさ。え、なにこれ？

「…俺ってやっぱ天才？」

「…馬鹿を言うのではない。我輩の魔方陣が完璧だったのだ」

「だってさ！おれの指定分もちゃんと反映されてるじゃん？！」

「えーい黙らんか！こないらんもんまで呼び寄せよって！我輩が欲しかったのは優秀な鳥類だけなのだ！」

「じゃあカワイ子ちゃんは俺がもらうもんねー。あげないもんねー！」

「あ、あの…」

「…！」

「あ？」

そう、現実逃避しようと思死に脳内で状況説明を試みていたのだけど、目の前のワンダー達は勝手気ままに話し出したので思わず声をかけて止めてしまう。だってなんか私の話っぽいし。しかも私なんかいらなかった発言しなかったか？あの黒いやつ。超失礼！人間、こんな状況でもイラっとしちゃうもんなのね。私ってば案外余裕ある。

「あー、俺はラカ。言葉通じる？」

赤い髪のチャラそう（ロングはみなチャラいんだ！）な男が名乗ると黒い方を向いて確かめる。

黒い方：何しろ黒いフードで頭から鼻下ほどですっぽり隠して着ているものも黒の長そで、シャツ？に黒のパンツスカートっぽいものをはいている。

それにしても赤い方は顔が整っているし、モデルか何かか？そしていまからその奇抜な衣装とヘアメイクで撮影かい？

「大丈夫だ。言語の一致はきちんと陣に組み込んである」

「さっすがー。てことで初めまして、お名前は？」

「し、白石美夕…」

「ミューね。これからよろしく」

呼び捨て！

名前を聞かれて思わずバカ正直に答えてしまったけど、私、流されてない？逃げた方がいいんじゃないの？

とりあえずニヤニヤしている赤い：ラカといった青年を無視して周りを確認する。

どうやらここは小さな部屋のようだ。私がいるのは壁際で、右斜め前にラカ。目の前に黒い人。その奥に扉があって窓などはない。：今更だけど不安になってきた。私、死ぬ？

とりあえず考えられる可能性は、学内で大人しく鳥かごの清掃に勤しんでいた私を拉致。怪しげな言葉（魔法とか、怖っ）を使うあたり宗教系だろうか。記憶がないし眠らされてたのかも：

そこまで考えて私は青ざめる。いや、リアルに私これからどうなるの？日本人ではなさそうな男二人だけど、きちんと言葉は通じるみたいだし、なんとか帰してもらえないだろうか。

頭をフル回転させながら考えを巡らせていると一際高い鳴き声が聞こえた。

ついさっきまでは余裕を保っていると思っていたけれど、気付かない内で極度の緊張状態だったようだ。なぜなら私は今の今まで忘れていたのだ、右手に乗っているセイキセイインコの存在を。

「連れてきちゃった…」

連れてきたのか一緒に連れられたのか、もはや何が何だかな状況だが大人しく指の上で待つインコは案外頭がいいのかもしれない。黙って小首をかしげている。こちらを見るくりくりした目が愛らしい。

「そ、その、女」

いつもは飛んでうぜえと思ってたことも棚に上げて、愛らしいインコに癒されていると、戸惑ったような低い声をかかれる。

生まれてこのかた17年。その女呼ばわりされたことなんぞ一度もない私は不快な表情を隠しめせずに顔を上げる。

「お前だ、女。その鳥を我輩に渡すのだ」

「…嫌です。この鳥は私のです」

正しくは私の所属する北明徳高等学校の、だけれどね！

けれども鳥一匹とて、こんな怪しい人物に渡せない。渡したが最後、焼いて食われた日にゃ私はもう飼育委員として全校生徒に顔向けできない。

右手のインコを庇うように胸に寄せて黒い男を睨む。そんな私の態度に眉を寄せて忌々しそうに見る黒い男に、ごく普通の女子高生としては恐怖感がないわけでもないが、今は自分の身も危険なのだ。気を許せば食われる…！

「…ユーク、何怯えさせてんの」

私と黒い男の睨み合いに呆れたような声がかかる。ああん？と敵意もそのままに声の主を見るとラカが平然とした顔でそばにたっていた。

「なあ、その鳥、なんていう名前？」

「名前……」

ラカにそう問われて私は口ごもる。飼育委員といえども名前をつけて可愛がつているわけではない。飼育上見分けるために色で判断することもあるが、それは名前ではないし、委員の中にはもしかしたら名前を呼んでいる生徒もいるかもしれないが、生憎私にはわからない。

「セキセイインコ……？」

ごめんなさい、それしかわかりません。

「セキセイインコ、長いな」

「言いづらいね」

文句言うなよ、そういう種類なんだから。

男二人であーだこーだ言っているのを眺めながら私は今のうちに逃げたるか、と考え奥にあるドアを確認する。

鍵などはかかってなさそうなので、ふいについて思いきり走れば行ける気がしないでもない。

とにかく建物から出られればタクシーでもなんでも拾ってなんとかしてでも家に帰る！こういう時に携帯電話をポケットではなくカバンに入れて置いたことが悔やまれるが、電波があるのか疑わしいのであってもしょうがないのかもしれない。

「よし、じゃあ頭とってセキィにしよう」

ぼん、とラカが間拔けな音をたてて鳥の名前を決めたその時、私は思いきり走り出した。急な動きに体が追いつかなくて少しよろめいたが、構わず走る。

位置上、黒い人の前を通るはめになるが、とっさの事に動きが遅れたのか捕まることはなかった。後ろから制止を叫ぶ低い声がある。行ける！そう思って思いきりドアを開け放つ。

「…え？」

てっきり廊下があるのだと思っていたそこには、カエルがいた。全長100センチほどの二足歩行可能そうな、それでいてわりと紳士的な3ピースのスーツを着た。

「おや、お客様ですか？」

「じゃ、べっ？…え?!」

「ノイ、そいつを捕まえるのだ！」

「坊ちゃん、女性にそのような言い方はよろしくないかと」

「ノイール、俺のだ乾いちやった」

「只今客室にてお茶のご用意が出来ましたので呼びに」

もうさ、もうさ、どうすればいい？

発狂しないだけマシなんじゃなからうか。

目の前で繰り広げられる会話や信じられない生き物から目をそらし、私は床にへたり込む。

そういえば昨晚読んだ小説もトリップものだったな。わりと好きな

んだよ、ファンタジー系。でも自分が行くとなったら話は別。全く別物なんだよ。

そこでついに私の頭が全てのことについていけなくなったのか、ショートした。

霞みゆく意識の中、私はなんとかありったけのパワーを込めて胸の内で叫ぶ。

神様どうか、夢オチで！

私はまさかの、一日で二度の暗転を体験することになった。

神様などいやしない

目が覚めると、真っ赤な瞳が飛び込んできた。

「ぎゃっ！」

思わず汚い悲鳴を上げて身をよじる。なんたって起き上がろうにも目の前の人物の腕によって両サイド阻まれてんだからしょうがない。

「おはよう」

「あー…」

にっこり挨拶された所で、どうにか頭をフル回転させて現状を思い出す。

「神様のバカあ！」

そして罵る。

だって、だって、だって！ここ全然どこかわからないままじゃん！目覚めてすぐに、空気が違った。冷えた、冬の朝のような空気。私、今は7月だったと思うの。そして目の前の男に、見覚えのない部屋…わぁ！と泣き崩れるように布団を被ってしまう私から離れる気のない人物、ラカは楽しそうに話し出す。

「ここにはカミサマなんていないよ。ミューの世界にはいるの?」

「いるわ。いないかもしれないけど、いることになってんのよ」

「ふうん。ところでミューが寝ちゃってる間にいろいろ決まったんだけど、聞く?」

「なにそれ」

何が決まったんだよ:

私は寝ても覚めてもな状況に思わず頭を抱える。

そんな私を見て少し困ったように笑うラカは、まあ夕食まではのんびりしなよ、と声をかけて部屋を出て行った。私はドアの閉まる音を聞き届けてから顔を上げて、部屋を見渡す。

相変わらず見覚えのない部屋には自分が寝かされているベッドと丸テーブル、鏡台が置いてあるだけだった。

一つだけある窓から建物の外が見えたが、鬱蒼と生茂る林があるだけのようだ。林というより見た目はジャングルに近い。

私はベッドの上で膝を抱えて縮こまる。昔から何かを考える時の癖のようなものだった。

なるべく、自分の中では信じたくなかったけれど、夢でも妄想でも無く私はよくわからない所にやってきた。ここが別世界なのか、地球のどこかなのか、まだわからない。でも幸か不幸か私にはこういったパターンの知識がある。といっても所詮フィクションでしかないけれど。

こういった場合、普通は帰り方がわかんなくて絶望して誰かと帰り方を探したり何か目的のために旅する、とかよね。そして旅する中で同行者に恋する什么的なものが王道:いや、今はこれ関係ないけど。でも、と私は自分のここへの”呼ばれ方”を思い出す。でも、私には帰り方がわかるじゃない!

「呼び出し方がわかる男なんだから、帰し方だってわかるでしょ！」

そうよ、私がここに来てすぐ、あいつらそんな事言ってたじゃない。電波系かと思ってスルーしてたけど、魔方陣がどうかとも！

がばっとベッドの上に立ち上がり、私はぐっと拳を握る。

とにかくあの黒いやつを探さなきゃ。

「どこにいるんだブラックメン…」

先ほどからある部屋ある部屋開けてゆくが一向に目的の人物は見当たらず、廊下も果てしない。更に右に曲がり左に曲がり移動している内に先ほど自分が目覚めた部屋もわからなくなる始末。

「もうさ、ラカって人でも誰でもいいから…っ」

私を見つけて案内して〜と俯きながら泣きごとを呟こうとしたところで、左の角から出てきた誰かにぶつかった。

自分の不注意なので申し訳ない気持ちもあったが、先に警戒心が働いてすぐにぶつかった相手から身を引く。

すると向こうも驚いたらしく、身を引こうとした所を別の誰かに咎められる。

「いけませんよ坊ちゃま。お嬢さま、お怪我はございませんか」

「え、はい」

「しかし…」

「先ほどの私のお話を思い出してくださいませ」

だ、れだ？

目の前には背の高い黒髪の青年と、エメラルドグリーンが少しくすんだ色をした髪と瞳をした青年が立っていた。

どちらも西洋っぽい服を着ているけれど、どこか雰囲気人間離れしている。（特に緑髪とか、とか！）
でも彼らの声はどこかで聞き覚えが：

「…申し訳ないのである」

どこだっけ？と首をひねっていると、実に不本意だ、と言った雰囲気
で黒髪に謝られる。そんな嫌々言われても、と思わなくもないが、
自分の前方不注意とわかつていたのでここは素直に頭を下げる。

「いえ、私の不注意ですので」

「そうだろう」

「坊ちゃま」

「我輩こそ気づけず申し訳ないのだ」

「はあ…」

なんなんだ。

黒髪の青年はそのままであればクールで品の良さそうな好青年なのに、
喋り方がどこか変だし、隣にいるアニメ髪（アニメでしか見たことないような髪の色、の意）は愛想は良いが、血色が悪いし、何かが不気味だ。

それに黒髪の方は：

「坊ちゃま、ついでに先ほどのご無礼も謝罪くださいまし」

「我輩は何も」

「坊ちゃま」

「黒いやつー！ー！！！！」

まだ何かもめている2人、正しくは黒髪青年の方を思いっきり指をさして叫んでしまった。

そうだ、そうだよ！同じ黒じゃん、話し方一緒じゃん。探してたやつじゃん。

私は目的の人物に出会えてほっとする。ついでに迷子も終わりになりそう。

「黒いやつではない。我輩はユークである」

「や、もう何でもいいよ。見つければ」

「よくないのである」

「はいはいはい」

めんどくさいのである。（うつった！）

ああでもこいつに頼まなくては家に帰る方法はわからないのだ。こんなどうでもいいこと言い合っている場合じゃない。

まだぶつぶつ文句を言っている黒い、ユークという青年に、尋ねてみる。

「あの、ユークさん。私自分の家に帰りたいのだけれど…」

ユークさんは私の声にビクッと一度肩を揺らして（一々失礼だな）、それなのだが…と困惑したような、言いにくそうな顔で言い噤む。するとそれを遮るようにアニメ髪が間に入って笑顔で廊下の奥へと導くように手を広げた。

「お二方、お夕食のご用意が出来ております。立ち話もなんですので、どうぞこちらでお話の続きでも」

にっこりと笑っているのにどうにも顔色が悪い青年はそう言って、果てしなく思えた廊下の突き当りにある部屋へと私たちを案内した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4659t/>

Magical Days

2011年10月9日03時45分発行